

『総合文化研究』第三号発行にあたって

総合文化研究所長 西永良成

『総合文化研究』第三号を刊行する運びとなった。

本号の特集は「東南アジアの文化と文学」である。この特集のためにインドネシアのセノ・グミラ・アジダルマ氏、ベトナムのヴァン・タム氏、カンボジアのキン・ホック・ディ氏、タイのトリ・シン・ブンカチョーン氏ら、それぞれの国で著名な学者・作家の方々がわざわざ本誌のために執筆してくださった。心からお礼申し上げたい。お陰でこの特集も他に類例のないユニークなものになったと自負している。また、本学で教鞭をとっておられたラオスの作家ウティン・ブンニャウオンの玉稿も頂くことができたが、同氏は惜しくも本年一月に急逝され、これが絶筆となった。衷心より氏に感謝するとともに、慎んでご冥福をお祈りしたい。また、本学の東南アジア文化・文学の専門家たちからもそれぞれ力作が寄せられ、多方面から私たちの多くが知らない文化情報、文学的考察を掲載することができた。『総合文化研究』も三号にして益々充実してきたという思いが強いが、これに気を緩めることなく、今後ともさらに独創的で有意義な特集を組んでゆかねばならない。

一九九九年は本学独立百周年にあたり、その記念シンポジウム「言語」の二二世紀を問う」が朝日新聞社の後援を得て開催され、本研究所のメンバーが中心的な役割を果たしたことを特筆しておきたい。これに加え、百年記念行事の一環として本研究所主催、国際言語文化振興財団共催、朝日新聞社後援による連続講演会「言語と表象」が開かれ、多くの聴衆を集めることができた。当初はこの連続講演会の記録をすべて本号に掲載する予定でいたのだが、諸般の事情で飯島洋一氏「テクノロジーと建築」のみを掲載することで満足せざるをえなかった。

さらに本研究所が九七年及び九八年に開催した公開講座「外国文学を翻訳する」が、この二月に「翻訳百年―外国文学と日本の近代」と題して大修館書店から一冊の書物として刊行されたこともここで報告しておきたい。

また、本号の書評欄および活動報告に見られるごとく、本研究所のメンバーが本年もまたじつに多様な分野で、きわめて多彩な成果を収めていることは心強いかぎりである。

世紀が変わる時期に刊行されるはずの次号は、ヨーロッパ、とりわけロマンス語系言語文化圏の文学の特集を予定している。フランス文学を専攻している私自身も編集に参加して、これまでの三号に負けない充実した内容にしたいと思っている。